広告特集 企画・制作　朝日新聞社メディア事業本部

医療・企業・行政と、幅広い領域に貢献する薬学教育

高齢化や労働力不足をはじめとする激しい環境変化にさらされる日本の医療。
薬剤師にも調剤や服薬指導・薬歴管理といった業務に加え、新しい役割が求められています。
今後を担う人材を養成する薬学教育のあり方について、
日本薬剤師会常務理事の山田 武志さんにうかがいました。

公益社団法人日本薬剤師会常務理事
山田 武志さん

●1974生まれ。97年日本大学薬学部卒業。同年日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社入社。2003年有限会社Y&A設立、同年厚生堂薬局開局。14年一般社団法人札幌薬剤師会副会長、22年一般社団法人北海道薬剤師会副会長、同年公益社団法人日本薬剤師会理事、24年から同常務理事（薬学教育委員会副担当理事、生涯学習委員会主担当理事）。24年国立研究開発法人国立長寿医療研究センター認知症医療介護推進会議委員、同年一般社団法人日本認知症予防学会理事。

変化・成長を続け、広い視野をもつ「これからの薬剤師」に

医療費の急激な増大が懸念される2025年を間近に、医療・介護業界は大きな変化を余儀なくされています。薬剤師も例外ではありません。従来の調剤中心の業務から、患者の健康サポートや地域医療への貢献など、新しい役割が求められています。また地方を中心に薬剤師不足が深刻化しており、電子処方箋（せん）やマイナ保険証を含むデジタル化にうまく対応し、これを乗り切らなければなりません。

薬学教育も変化しています。薬剤師の資格取得には6年制の薬学部卒業が必須となり、以来長期的なカリキュラムの中で実践的な力が養われるようになりました。知識と技術にたけた薬剤師が輩出される一方で、例えば在宅医療においては患者宅を訪問し、地域医療においては多職種と連携する必要があります。学生のコミュニケーション能力を伸ばす教育は今後ますます重要になるでしょう。

私は化学への興味を入り口として薬学部に進み、卒業後は製薬会社のMRを経て薬局に勤めました。企業や行政を含む幅広い進路がある点は薬剤師ならではの魅力です。今後は認知症や感染症予防の相談など、気軽に薬局を利用する場面も多くなることが期待され、新たなやりがいも見いだせるでしょう。

絶えず訪れる変化に前向きに対応し、生涯学び続ける。さらにはリソースが不足する地方にも目を向けられる。そんな資質をもった「これからの薬剤師」を、ぜひ目指していただきたいと思います。